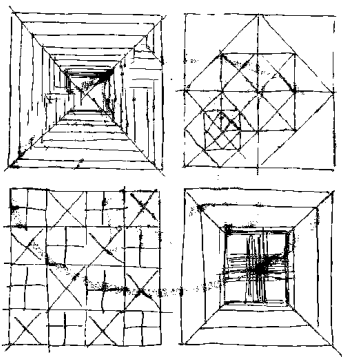
ずいひつ

樹に千びきの毛蟲

吉行淳之介



潮出版社

ずいひつ　樹に干びきの毛蟲

昭和 48 年 2 月 25 日　初 版
昭和 48 年 4 月 15 日　5 刷

定価 700 円

著 者　吉行淳之介

発行者　島 津 矩 久

東京都新宿区南元町 14—1
発行所　株式会社　潮 出 版 社
電話 (357) 7111(代) 振替東京61090
〒 160

印刷　図書印刷

落丁・乱丁本はお取替えいたします。
© J. Yoshiyuki 1973 Printed in Japan

まえがき

私の著書で、「あとがき」のあるものは多いが、「まえがき」を付けたものは、これが最初である。なぜそうしたか、といえば、ここからこの本の中身は始まるので、正確にいえば「まえがき」ではなく、本文の冒頭ということになる。

ここに集めたもののうち、第一章と第三章は主として昭和四十六年度、第二章は四十七年度の仕事であるが、この二年間に私は心身ともに暗澹とした状況にじわじわ追いこまれていった。まるで時代の流れに歩調を合わせているようにおもえてくる。

私が四十七歳の四十六年には、全集全八巻が出版になった。小説家としては、嬉しい筈の事柄だが、八冊揃った本を眺めていると、それが自分の墓石のようにみえた。本当は、「全集」の名を避け、「作品集」ということにしたかったのだが、ことの成行きでそうなった。そのことも、なにやら意味ありげにおもえてきた。

その「全集」最終巻の月報に、私は次のような短文を書いた。

『唐突だが、昭和四十七年は、私にとって背中をまるめて何者かをやり過ごさなくてはならぬよ

うな予感が濃い。その「何者」かは幾つか列記できるような気もするし、私自身まったく見当のつきかねるもののような気もする。漠然とした言い方で申し訳ないが、この曖昧さが私の実感なのである。

四十七年度は、あまり仕事はできないだろう。しかし、たくさん勉強したい。伝記の類などを読むことが、その勉強の内容になりそうだ』

この予感は、当たってしまった。事件の続出で、到底いわゆる「四十七年度十大ニュース」では収まり切れない。そのほとんどが、暗く危険な事柄で、いわゆる文壇では、川端康成自殺、有馬頼義自殺未遂など、予想もしなかったことが起こった。

私個人については、仕事もまったくできなかったし、読書さえあまりできなかった。その原因の半分以上は、アトピー性皮膚炎の極端な悪化で、要するに皮膚の上を嵐が吹き荒れ、じっと蹲っているほかはない毎日がつづいた。食べることも、眠ることも、苦痛で、「ぶらぶら休養」という贅沢な感じはまったく無かった。第二章は、すべて小康のときの談話筆記に手を入れたものである。

ここに落ちこんでゆく経過を、第一章の文章の背後に見ることができるので、私としては興味がある。これは『週刊読書人』に連載した文章が大部分であるが、ある人が次のような手紙を寄越した。『毎回愛読しました。おかしくておかしくてたまりませんでした。どこがおかしいのか具体的には言えないのですが全体になんとなく——。ヤケになってしまうと面白くないし、のほ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ほんとしているのはなおさらいやみですが、ヤケとヤケでないのとすれすれの実に変なおかしさで。で、いつも大笑いをして（これはひとりに限るのです。誰かに言って一緒に笑うという筋合いのものではないのです）、こんな書き方をしているのは、もしかすると非常に精神状態が悪いのかも知れないぞ、ひどいことになっているにちがいない、などと勝手に推量していました』まことに鋭い洞察力で、私は驚いた。

四十八年になってから、ようやく健康のほうは人心地ついてきた。一応、軀の病気は快方に向かっているが、どうなるか。

著　者

ずいひつ　樹に千びきの毛蟲　目次

まえがき　1

第1章　作家のノート

百メートルの樹木　13
若死した父親のこと　15
一通の封書が届く　20
知りたくない気分　22
文豪の娘について　24
難解ということ　26
ある種の晩年意識　28
ある記念会場にて　34
戯作者ということ　36
「花冷え」の季節　38
桜の花がきれいだよ　40
悲しいなんて贅沢なこと　42
純粋・時点・造反　45
怒りと慣れ　47
私と教科書　49
いよいよ老眼か　52
傘を売った話　54
愚痴っぽい文章　54
ミステリー・ゾーン　56
ある調査表のこと　58
内田百閒氏のこと　61
嫉妬か含羞か　63
風が吹けば　65
アフォリズム　67
乳離れせぬ若い衆　69
葬式について　73

貰い下手 75
電話が鳴る 77
放課後の仲間 79
幻化忌の夜 81
暑い日曜日 83
記憶について 85
食い違いについて 87
いやな夢こわい夢 89
ハーフ・シーリアス 91
続・ハーフ・シーリアス 93
某月某日 95
一代かぎり 97
奇妙な夢 100
断片的に 102
酒中日記 104
悪い季節 109

作家は職業か 111
前言訂正 113
ある感想 115
「海の百合」のこと 117
サドの周辺 121
志賀直哉氏のこと 124
むつかしい日本語 126
綴方について 128
十一月二十六日のこと 130
草を引っ張ってみる 132
うらぶれた記憶 134
飼い馴らしと書きおろし 136
白痴化 140
新春一言 144
行方不明のレコード 145

第2章　上野毛だより

喧嘩について　151
テレビを楽しむ法　156
自慢話というもの　161
音楽あれこれ　166
ゼニカネの話　171
服装について　176
樹に千びきの毛蟲　182

第3章　対　談

「暗室」を語る＊古屋健三　191
「私の文学」を語る＊三好行雄　223

装幀　栃折久美子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

樹に干びきの毛蟲

ずいひつ

第1章　作家のノート

百メートルの樹木

内ポケットに入るくらいの薄いノートを一冊、私はもっている。先日『三田文学』で「暗室」という私の作品について、対談をした。こういう形は厭味になりかねないので、ためらったが結局引受けることになった。そのとき、ノートがあるなら持ってきてくれと言われたが、こういうときの役には立たない種類の内容である。モチーフやテーマについては、ほとんどなにも書きつけていない。

このノートは、昭和三十三年に「男と女の子」という『群像』に載った二百枚くらいの作品を書くときから使いはじめた。以来、現在にいたるまで、新聞や週刊誌の長篇も含めて使っているが、まだ余白がある。ディテールの重複や筋の混乱を避けたりするための、心覚えのメモのようなもので、つまらぬノートである。

チェーホフには、おもしろい「手帖」がある。一篇の小説のエッセンスが含まれているような数行や、目に触れたものを鋭く受け止める数行などから成立っている。この連載では、そういう要素も加えてみたい。

一昨年、青森県から上京してきた手伝いの人が、小さな苗をもってきて、玄関の傍へ植えた。草花の苗のようにみえるものだが、花もつけず、膝ぐらいの背丈のままで、二年間が過ぎた。

それが今年の二月になってから、突然伸びはじめた。成長の速度が、ただごとではない。一ヵ月足らずのあいだに、人間の背の二倍くらいになってしまった。まわりに植わっている小さな木などに、養分がまわらなくなって、枯れるおそれが出た。おどろいて、植物図鑑で調べてみると、草花どころか、樹木である。それも並大抵の類のものではない。

ユーカリ、という樹である。この名前は、喫茶店や酒場などでよく見かけるものだが、どういう樹なのか、はじめて分かった。普通の樹木の十倍の速度で大きくなり、高さは百数十メートルになる。その木材は、舟をつくるのに用いる、とある。ロビンソン・クルーソーが、孤島から脱出するために使うような樹である。

玄関の傍に、百数十メートルの巨木が生えては困るので裏庭に移しかえることにした。掘り起こしてみるとタコの足のような形にはなっておらず山芋のような根に、短いヒゲ根がついているだけで一安心した。ところがこの根が、いくら掘ってもおわりにならない。土管が出てきたところで、根をノコギリで切って、移植した。

二年間、地上にみえている部分は大きくならないで、地面の下のほうへ伸びていたわけである。目に触れない部分の態勢が十分に整ってから、俄然ニョキニョキ伸びはじめたというのは、面白くもあり、不愉快でもある。地下の根が、じわじわと長い間まわりの滋養分を吸い取って、うず

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com